永禄４年の大鳥居造営

嚴島神社の現在の大鳥居（重要文化財）は明治８年（1875）に建てられました。平清盛の時代のものを初代とすると、８代目にあたります。

歴代の大鳥居の中で「最長不倒」を誇るのは、毛利氏の時代に建てられた５代目です。このときの工事の様子は、大願寺文書によって詳しく知ることができます。

４代目の大鳥居は、大内氏の時代の天文 16 年（1547）に造営されましたが、10 年ほどで失われたようです。喪失の原因もわかりませんが、もっとも短命の大鳥居でしょう。

５代目の造営が始まったのは永禄３年（1560）10 月のことです。毛利元就奉行人児玉就秋（こだまなりあき）と隆元奉行人粟屋元種（あわやもとたね）が連署して、材木や資材の調達を大願寺に指示しています。元就・隆元は天文 16 年の造営にも協力していますから、２代の大鳥居の造営に関わったことになります。

実際の作業は永禄４年（1561）正月から始まり、２月 16 日から３月 15 日まで能美島で「身柱」（主柱）２本の伐り出し作業が行われています。「脇柱」（袖柱）は仁保島（広島市南区黄金山）と岩国で２本ずつ伐り出されました。

主な材木がすべて宮島に到着したのは４月 26 日です。動員された人数は延べ 9,292 人、うち 5,173 人は能美島で「身柱」の伐り出しに従事しています。巨大な柱の用材の輸送がいかに難事業であったかがわかります。

５代目の大鳥居は正徳６年（1716）７月 20 日に風もないのに倒壊したと伝えられています（正徳５年とする記録もあります）。建立から 155 年目のことでした。

現在の大鳥居も、今年で建立から 144 年目を迎えます。2019 年６月からは大規模な修理工事が予定されています。宮島学センターとしても、この機会に大鳥居の歴史を振り返る企画展の開催を計画しています。

（秋山 伸隆）

（「宮島学センター通信」第 10 号・2019 年 3 月）